

ライフコースにおける情念の処理について

— 流行歌の歌詞を手がかりに —

山 岸 治 男*

【要 旨】 一般に、ライフコース（人生行路）には予測外の出来事が伴う。それが本人にとって不本意、不利、不条理と感じられる時、人は、そうした私情を処理すべき課題に直面する。不条理感などを情念と言い換えれば、社会は情念の処理について一定のルールを個人に要請してくる。絶望や悶え、投げやり・戸惑いなどの心理状態も社会的ルールにしたがう解決を求められる。本稿は、不条理感などの情念を、近代日本人が社会的ルールと関わってどのように処理してきたか、流行歌の歌詞分析から、その一端を見ようとするものである。

【キーワード】 ライフコース 情念 他者・社会・神 社会性 意思

はじめに

ライフコースには様々な不条理やそれに類似する出来事が発生する。例えば、まじめにした仕事に叱責を受けたり、誠実に生きているつもりなのに家族に不幸が続いたり、恋愛感情が一方通行だったり等。こうした事態に対し、社会は、先ず、本人に忍耐や努力などで解決するよう内面に関する文化規範をもって迫る。では、そうした忍耐や努力はどんな社会的・心理的仕組みに於いて可能なのか。また、忍耐や努力が当人に於いて困難な時、当人の内面にどんな処理機能が発生するのか。

この間は、今日の「キレやすい」少年に関する言説を理解したり、こころに傷を負った人のこころの状態を理解したり、癒したりする上で意味のある問と思われる。忍耐や努力など、一般に心理的機制にのみ収斂されがちな「内面規範」を社会的存立基盤から検討する意味が潜在すると考えられるからである。以上の関心から、本稿では流行歌の歌詞を素材に、次の課題を検討したいと思う。なお、流行歌という大衆文化を素材にするのは、一般大衆の情念の吐露を、最も素朴な形で「鏡」のように写し取る装置の一つが流行歌であると考えからである。¹⁾

- 1) 不条理感を乗り越えるための「内面規範」とこころの葛藤を探る。
- 2) 葛藤の展開とこころの変化・発達をライフコースにおいて検討する。
- 3) 絶望の「情念」を、希望の「信念」に転換する要件を検討する。

平成 18 年 10 月 31 日受理

*やまぎし・はるお 大分大学教育福祉科学部社会教育・教育社会学教室

I 生活経験の「語り」としての流行歌

人は一般に、自然、社会、他者及びそれらが錯綜して作り出す様々な出来事を環境として生活し、その時間的推移においてライフコースを生み出している。時には環境を恵みとして利用・活用し、時には環境をストレスと感じて疎んずる。このうち特に、こころに耐え難い不運をもたらす環境に対し、私たちは「不条理」を感じる。不条理感はその根源的出来事等の生活経験を他人に語って、こころを癒さないではいられない心情として内面に堆積しやすい。こうした語り文化として一定の形式を踏んだのが流行歌、とりわけ「演歌」である。歌は「打つ」の再活用で「訴う」を本義とすると折口信夫がいったくらいに、「訴え」ないではいられない歓喜や情念が「歌」の内面にあるとすれば²⁾、その内の、特に情念の「訴え」を中心に形を整えたのが日本近代の流行歌だといえるのではないか。例えば、いつしか巻き込まれた戦争で身内を失い、生きるために占領軍の兵士などを相手に売春をしなくてはならなくなった女性を、「星の流れに」は次のように歌う。³⁾

(星の流れに) 清水みのる・詩、利根一郎・曲、菊池章子・唄、昭和22年

- 1、星の流に身を占って、 何処をねぐらの今日の宿、 荒む心でいるのじゃないが
泣けて涙も潤れ果てた、 こんな女に誰がした
- 2、煙草ふかして口笛ふいて、 的もない夜のさすらいに、 人は見返るわが身は細る
町の灯影の侘びしさよ、 こんな女に誰がした
- 3、飢えて今頃妹はどこに、 一目逢いたいお母さん、 唇紅衰しや唇かめば
闇の夜風も泣いて吹く、 こんな女に誰がした

歌の主人公は家族を見失い、独り身になった若い女性である。まだ、どこか母親に甘えたい気分も残している。しかし現実には、今を生きるために自分を相手に遊んでくれるアメリカ兵などを待たなければならない。本心から望む仕事ではない。格好をつけて煙草を吹かし、派手に唇紅を塗りまくって、不条理感を必死にこらえているのが伝わってくる。

詩人の松永伍一は、流行歌の内、特に演歌を情念が吐露された歌というが、⁴⁾星の流れにわが身を占う主人公は嗚咽(おえつ)・慟哭(どうこく)等のどんな語をもってしても適切には表現できない情念の渦中にある。昨今の出来事であれば、飲酒運転により、愛し子3人の命を一瞬にして奪われた被害両親の心境がそうかもしれない。

II 生活に生まれる諸課題と情念の湧出

人の生活には、何の変哲もないいつも通り、予測通りの、ほぼ決まり切った経験以外に、解決困難な問題や課題が立ち現れる。まだ、自我の殆ど未確立な子どもにとって、こうした問題や課題は、うろたえたり、途方に暮れたりするより、他にどうしようもないものであるに違いない。昭和初期(1930年代)に発生した農村恐慌(貧困による零細な農家の経済破綻)を主な理由に、曲芸を主とする旅芸人一座に身売りされた子どもをテーマにした「越後獅子の唄」を出してみよう。

(越後獅子の唄) 西条八十・詩, 万城眼正・曲, 美空ひばり・唄, 昭和25年

- 1, 笛にうかれて 逆立ちすれば 山がみえます ふるさとの
わたしゃ孤児 街道ぐらし ながれながれの 越後獅子
- 2, 今日も今日とて 親方さんに 芸がまずいと 叱られて
撥でぶたれて 空見あげれば 泣いているよな 昼の月
- 3, うつや太鼓の 音さえ悲し 雁が啼く啼く 城下町
暮れて恋しい 宿屋の灯 遠く眺めて ひと踊り
- 4, ところ変われど 変わらぬものは 人の情けの 袖時雨
ぬれて泪で おさらばさらば 花に消えゆく 旅の獅子

主人公は、自分の不条理をまだ整理する力を持ち合わせない子どもである。親元から強引に引き離され、一時は一座の親方を憎悪したかも知れないが、その親方について行かなければ生きてはいけない。親方や兄弟子から時たま厳しい修行も受けようが、その日の芸が終了し、安宿に身を寄せたときは、親方も兄弟子もない「漂流の民」として社会の下層に位置づけられる集団である。

同じ子どもでも、年齢が長じた場合、不条理感を形にして訴えかけることがある。

(ガード下の靴磨き) 宮川哲夫・詩, 利根一郎・曲, 宮城まり子・唄, 昭和30年

- 1, 紅い夕日が ガードを染めて, ビルの向こうに沈んだら, 街にヤネオンの花が咲く
俺ら貧しい 靴磨き, ああ 夜になっても 帰れない
- 2, 墨に汚れたポケットのぞきや, 今日も小さなお札だけ, 風の寒さや ひもじさにや
馴れているから泣かないが, ああ 夢のない身が つらいのさ
- 3, 誰も買ってはくれない花を, 抱いてあの娘が泣いている, 可哀想だよ お月さん
なんでこの世の幸せは, ああ みんなそっぽを 向くんたら

主人公は少年であろう。年下と思える似た境遇の少女に同情している。夢、即ち、希望のない日々を、しかし、投げやりせずじっと耐えている姿が痛々しい。

年長の子どもの場合、時には不条理感を「世間」にぶつける場合もあろう。それに対しては「非行」などのレッテルも貼られやすい。

(圭子の夢は夜ひらく) 石坂まさを・詩, 曾根孝明・曲, 藤 圭子・唄, 昭和45年

- 1, 赤く咲くのはけしの花, 白く咲くのは百合の花, どう咲きやいいのさ この私,
夢は夜ひらく (以下, 繰り返し)
- 2, 十五, 十六, 十七と 私の人生暗かった, 過去はどんなに暗くとも //
- 3, 昨日マー坊 今日トミー, 明日はジョージかケン坊か, 恋ははかなくすぎて行き //
- 4, 夜咲くネオンは嘘の花, 夜飛ぶ蝶々も嘘の花, 嘘を肴に酒をくみや //
- 5, 前を見るよな柄じゃない, 後ろ向くよな柄じゃない, よそ見してたら泣きを見た //
- 6, 一から十まで馬鹿でした, 馬鹿にや未練はないけれど, 忘れられない奴ばかり //

家庭か、あるいは学校や職場か、世間一般か、何かにぶつきたい情念を遊び型の少年との戯れで紛らす少女の心情が読み取れる。

以上、不条理感に対する子どもの受けとめについて流行歌の歌詞に探ってみた。では、年齢と社会的経験を累積する成人は、この情念をどう処理・解決するであろうか

Ⅲ 情念の調整とこころの発達

情念をどのように調整・制御・処理・解決するかは、一人ひとりの個人においても社会においても重要な課題である。個人における情念調整の混乱は、ライフコースの進行に影響するであろう。新聞の三面記事は、情念の調整がうまくいかなかった場合に、主として個人がそれを解決できないことから引き起こす事件によって埋められている。

他方、社会は、こうした情緒不安定者の多発によって、社会的風潮や雰囲気、風土などの上でマイナス価値を帯びることがある。例えば、経済的行き詰まり、あるいは外交交渉の困難が長引く等によって多数の国民に複雑な情念が鬱積し、その「はけ口」として弱小と見なした国や民族を攻撃する風潮が生まれるなどである。⁵⁾

その意味で、人は、いわゆる私情の一部を構成する諸情念を、人間的・社会的経験の累積過程に於いて、公正な感情に調整する能力を付けなければならない存在である。社会福祉や公教育、生涯学習の本義もこの点にあるであろう。この論議を敷衍（ふえん）すれば、人のこころの発達には、プラス価値に即して情念を調整する力を習得することと言えるであろう。では、不条理感・絶望・怨恨などの諸情念はどのようにして公正な意思や希望・信念などに切り替えることが出来るであろうか。

流行歌、とりわけ演歌の歌詞を一瞥すると、1)「あきらめ」を「諦念」から「明らめ」、即ち、環境条件の理解・受容に立つ「希望」へとベクトルを変えるもの、2) 社会と深く関わらずに私的世界を中心に生きるベクトルを取得するもの、3) 不法・無法ながらも社会と争うベクトルを思わせるもの、4) 人や社会を恨み続けるベクトルを思わせるもの、など様々な心情の困惑が展開する様子が分かる。具体例を挙げておこう。

(異国の丘) 増田幸治・詩、佐伯孝夫・補作、吉田正・曲、竹山逸郎・唄、昭和23年

- 1, 今日も暮れゆく 異国の丘に 友よつらかる せつなかる
我慢だ待ってろ 嵐が過ぎりゃ 帰る日も来る 春が来る
- 2, 今日も更けゆく 異国の丘に 夢もさむかる つめたかる
泣いて笑うて 唄って耐えりゃ 望む日が来る 朝が来る
- 3, 今日も昨日も 異国の丘に おもい雪空 陽がうすい
倒れちゃならない 祖国の土に たどりつくまで その日まで

主人公は太平洋戦争末期に旧ソ連軍に連行された一人の日本兵である。餓死・凍死・疲労死などが日常化する捕虜生活を、諦めずに祖国に帰る日を胸に、耐え抜く意志と仲間への呼びかけがメッセージとして唄い込まれる。異国、嵐、雪空、寒い、冷たい…は絶望感などを表現する。その行間に、帰る日、春、望む日、朝…などの希望表現がちりばめられ、全体として希望に向かう心情が唄われる。

(おんな船頭唄) 藤間哲郎・詩, 山口俊郎・曲, 三橋三智也・唄, 昭和30年

- 1, 嬉しがらせて 泣かせて消えた 憎いあの夜の 旅の風
思い出すさえ ざんざら真菰 鳴るなうつろな この胸に
- 2, 所詮かなわぬ えにしの恋が 何故にこうまで 身を責める
呼んでみたとして はるかな灯り ぬれた水棹が 手に重い
- 3, 利根で生まれて 十三七つ 月よあたしも同じ年
かわいそうなは みなし子同志 今日もお前と つなぐ舟

ここには、恋して添えない相手への、断ち難い私情が漂っている。しかし、主人公の女性は、心を持たない月という自然を友として自分の生活世界を閉じこもりがちに生きることで、この情念を忘れようと努めているのである。

(あばれ太鼓) たかたかし・詩, 猪俣公章・曲, 坂本冬美・唄, 昭和62年

- 1, どうせ死ぬときゃ 裸じゃないか あれも夢なら これも夢 愚痴はいうまい
玄海そだち 男命を情けにかけて たたく太鼓の あばれ打ち
- 2, 酒と喧嘩は あとへはひかぬ 意地と度胸の 勇み駒 惚れちゃならない
義理あるひとに 知って照らすか 片割れ月に 男泣きする 松五郎
- 3, 櫓太鼓の 灯りがゆれて 揃い浴衣の 夏がゆく ばちのさばきは
人には負けぬ なんでさばけぬ 男のころ 小倉名代は 無法松

文字通り男性ジェンダー⁶⁾を貫こうと、恋の情念を太鼓にぶつける無法松の内面を歌ったものである。村田英雄がうたった流行歌「無法松の一生」では、「愚痴や未練は玄界灘に捨てて太鼓の乱れ打ち」と唄われる。主人公は、情念をかき消そうと躍起になるが、情念がなかなか消えないことは、「あばれ打ち」・「乱れ打ち」の言葉や歌詞全体から読みとれる。

(裏町人生) 島田 也・詩, 阿部武雄・曲, 上原敏・結城道子・唄, 昭和12年

- 1, 暗い浮世の この裏町を 覗く冷たい こぼれ陽よ
なまじかけるな 薄情け 夢も侘しい 夜の花
- 2, 誰に踏まれて 咲こうと散ろうと 要らぬお世話さ 放ったきな
渡る世間を 舌打ちで 拗ねた妾が なぜ悪い
- 3, 自棄に喫かした 煙草の煙 こころ虚ろな 鬼あざみ
ままよ火の酒 呷ろうと 夜の花なら 狂い咲き
- 4, 霧の深さに 隠れて泣いた 夢が一つの 思い出さ
泣いて泪が 枯れたなら 明日の光を 胸に抱く

ここでは、他人の情けさえも、「要らぬお世話」と退け、社会に背を向ける姿が描かれる。とは言え、多くの人は不条理感をいつの日か乗り越える。では、この乗り越えにはどんなメカニズムが横たわっているだろうか。先ず、広義の社会的要請の視点から、次に、そうした要請を受けて、個人の内面に形成されるこころの変化・発達の視点から観察しよう。

最も広義の社会的要請は「内面規範」とも言える文化的機制である。演歌においてはよく「男じゃないか」・「男なら」・「女ですもの」・「女ながら」などの詞が唄われる。社会はジェンダーをもって不条理に堪え忍ぶよう迫るのである。「男なのだからがまんする」、「女なのだから黙従し」、「情念をこころに閉じこめ」、「時間の経過を待つて」、解決したのである。こうした態度が過度に強化されれば、男性は意に反する「忍耐」を、女性は意に反する「忍従」を強制される。それは要請というより統制になる。

他方、近代合理主義・個人主義社会の発生以降、こうした「内面規範」は後退し、法令や専門家などが支援を開始する。人権教育、男女平等思想、カウンセラーの配置、行政機関における相談機能の拡大など。だが、こうした近代的支援が浸透する裏で、個人の内面強化過程はむしろ先細りの状態であるように思われる。そこでは、わがままや自己中心主義、耐性欠如などが問われはじめる。昭和の流行歌には、勿論、ジャズもシャンソンも導入された。ニューミュージックと言われる新分野もあった。だが、全体として多いのは演歌系の流行歌である。不条理感とそれを克服する社会的装置としての「内面規範」の、どちらにもすなおには馴らされ得ない、本心を吐露する上で最も親近感の持てたのが、演歌だったからではなからうか。したがって、不条理感が軽減し、ジェンダーフリーが当然視され始めた今日、演歌が旧時の勢いを失うのは必然的成り行きかも知れない。

では、不条理感に対し、「内面規範」はどのように日本人のこころに作用したであろう。「男はつらいよ」と「下町の太陽」を例に出してみよう。

(男はつらいよ) 星野哲郎・詩、山本直純・曲、渥美清・唄、昭和46年

- 1, 俺がいたんじゃ お嫁にゃ行けぬ わかっちゃいるんだ 妹よ
いつかおまえの よろこぶような 偉い兄貴になりたくて
奮闘努力の 甲斐もなく 今日も涙の 今日も涙の 日が落ちる 日が落ちる
- 2, ドブに落ちてても 根のある奴は いつかは蓮の 花と咲く
意地は張っても 心の中じゃ 泣いているんだ 兄さんは
目方で男が 売れるなら こんな苦労も こんな苦労も かけまいに かけまいに
男とゆうもの つらいもの 顔で笑って 顔で笑って 腹で泣く 腹で泣く

(下町の太陽) 横井弘・詩、江口浩司・曲、倍賞千恵子・唄、昭和37年

- 1, 下町の空に かがやく太陽は 喜びと悲しみ写す ガラス窓
心のいたむ その朝は 足音しみる 橋の上 ああ太陽に 呼びかける
- 2, 下町の恋を 育てた太陽は 縁日に二人でわけた 丸いあめ
口さえきけず 別れては 祭りの午後の なつかしく ああ太陽に 涙ぐむ
- 3, 下町の屋根を 温める太陽は 貧しくも笑顔を消さぬ 母の顔
悩みを夢に うちあけて 路地にも幸の くるように ああ太陽と 今日もまた

例示した歌に共通するのは、情念が「疼く」と言うよりも、「軽く受け流される」状態が唄われることである。確かに「男とゆうものつらいもの 顔で笑って腹で泣く」、「口さえきけず別れては」とジェンダーに拘束された一面は吐露される。だが、詩と曲の全体像からは、どろどろした情念は感じられない。

では、ここでは、「内面規範」はどのように受け入れられたか、歌詞に探ってみよう。渥美の歌には、兄として可愛くてならない妹がいる。また、賠償の歌には、家族があり、下町の風景がある。どちらの歌も、孤立状況ではなく、人間関係として絆を結んだ相当数の関係する「他者」が主人公の生活世界に生きている。そこでは、主人公達は、愛する関係者と共に生きようとする自覚があり、規範として受け止めたジェンダーを、「悩みも夢も語れる」取り巻き仲間の支えによって、とりあえず受容するのである。

ここに、情念の調整に関する一つの手がかりが得られる。不条理感などを過度に我慢して包み込むのではなく、受け入れながらも軽く流すところの発達に関する機制と、それを実現する必要条件についてである。

IV 情念の処理過程から見たところの発達

旧来、情念を生む主たる要因の多くは、自然・社会・他者などの環境側に求められていた。近時生まれ始めた新たな情念は、それが生まれる主たる原因が当事者自身に由来するものである。情念の主な発生由来が環境側にある場合、社会が要請する「内面規範」をめぐって、拗ねたり、突っ張ったり、逃げたりするところの葛藤は、大衆の賛同・共鳴を得ることができた。演歌流行の背景には、情念が疼くところの葛藤に対する大衆の共感があったのである。「本心は〇〇なのだが」、義理があったり、男だから・女だからなどのジェンダー規範があったり、長男だから・責任者だからなどの役割規範があったりして、本心と異なる行為をとらざるを得ない事態への同情があったのである。そこでは、情念は乗り越え克服すべき「私情」として処理されることが基本であった。

これに対して、今日生まれはじめている新たな情念は、環境の所為にはしにくいもの、即ち、当人の欲望の葛藤に由来するものに変わりつつある。たとえば、「遊びたいが、幼子がじゃまになる」、「金になるよいアルバイトがあるが、必修科目の講義と時間が重なる」などである。こうした私情は周囲からの同情や共感を得にくい。勢い、私情は当該個人の内側で空回りし、激しくなる。ここに生ずるのが「キレやすい」ところである。

今日、湧出しつつある私情（基本は欲望か）は、他者や社会、さらには自然や神などの繋がりを持たず、内面が「はらわたを搔き出すように」露わにされる。人は一般にどんな時でも他者や社会と繋がりを持とうとし、それが拒絶された場合でも、最後の抛り所として神や自然をつなぎ止めていた。ヤクザに身を落としながらも「勘太郎月夜唄」の主人公は「月よ見てくれこころの錦」と、相手にしてくれない身内や世間には背を向けたが、月という「心変わりしない」大自然に心を繋ぎ、辛うじて「キレ」ないでいるのである。「キレ」は、周りの環境との関係切断を意味する。そうなると、当人の独りよがりや露わになる。それが暴力的にでた場合、これを沈静するには「力」以外に方法がない。警察を民事に介入させる事態が生まれるのである。

「キレた」場合、当人に自己を振り返り反省する手がかりは容易にはつかめない。人が我が身を振り返る契機は、他者や社会、神の目などを感じとることによる。「キレた」状態では、それは容易でない。したがって、「キレた」状態が長引けば発達上に支障をきたす。伝統的社会においては、これを長引かせないために、ジェンダーのような文化的規範を具体的に強制する身内・仲間・近隣などからの実質的抑圧が作動した。親族会議・世話焼き・節介・説教などが実

質的に行われていたのである。

では、情念の解決・処理は、心の発達過程全体においてどんな意義を持つだろうか。情念の解決・処理には「他者の視点」・「社会の視点」・「神の視点」などの、少なくとも一つ以上の視点が関わる。この関わりを受容したとき生まれるのが「関係」である。世のため、人のため、神に誓って、などが日常的にも語られる。人や社会や神との「関係」は、私情を冷静に見つめさせ、さらには、私情を制御（コントロール）する心の力（人間力・社会力、社会性、自己意志、信念など）を習得させる基礎的条件である。私たちは、「関係」を構築し、調整し、深化発展する状態に対して、こころの発達を見るのである。

したがって、こうした関係なしに私情を制御した場合は、真にこころが発達するとは考えられない。例えば、権力的地位にある故に大衆の「おだて」があり、それに乗る形で私情がとりあえず治まる場合である。人気者である場合や、時代の寵児としてもはやされる場合も同じであろう。これらに共通するのは、人や社会や神と対峙し、自己を厳正に観察するこころの作業を怠ることである。権力的地位から脱落し、人気を失い、時代にもはやされなくなった場合の事例を見れば一目瞭然である。

こうしてみると、人がライフコースを通して発達する過程には、環境との間に様々な作用が展開し、一つひとつの作用ごとに幾多の経験を累積することが解る。そこに、思索・検討・考察などの思考作業を導入することによって、「こころが出来ていく」側面があることになる。流行歌の歌詞に探ってみよう。

（花街の母）もず唱平・詩，三山敏・曲，金田たつえ・唄，昭和48年

- 1, 他人にきかれりやお前のことを 年のはなれた妹と 作り笑顔で答える私
こんな苦勞にケリつけて たとえひと間の部屋でよい 母と娘の暮らしが欲しい
- 2, 厚い化粧に憂いをかくし 酒で涙をごまかして 三味にせかれてつとめる座敷
あれが子持ちの芸者だと バカにされても夢がある それはお前の花嫁姿
- 3, 何度死のうと思ったことか だけど背で泣く乳呑み児の 声に責められ十年過ぎた
宵に棲とる女にも きっといつかは幸福が 来ると今日まで信じて生きた

夫に先立たれ、子育てのために花街で働く母親を唄ったものである。辛さに耐えきれず、死のうと思ったことも何度かあるが、娘の成人した姿に希望を寄せて私情を乗り越えた歌である。親子関係への気づきがこの女性のこころの発達のカギを握っている。

（喜びも悲しみも幾年月）木下忠司・詩・曲，若山彰・唄，昭和32年

- 1, 俺ら岬の 灯台守は 妻と二人で 沖ゆく舟の 無事を祈って 灯をかざす //
- 2, 冬が来たぞと 海鳥啼けば 北は雪国 吹雪の夜の 沖に霧笛が 呼びかける //
- 3, 離れ小島に 南の風が 吹けば春来る 花の香便り 遠い故里 思い出す //
- 4, 朝に夕に 入船出船 妻よがんばれ 涙をぬぐえ もえてきらめく 夏の海 //
- 5, 星を数えて波の音きいて 妻と過ごした幾年月の よろこび悲しみ 目に浮かぶ //

妻と二人で離れ小島の「へき地」勤務を継続したが、そこには、無数の船舶の安全な航海という社会的任務が横たわっている。都会で遊びたい気持ちや、子どもの教育で迷ったこともあ

ったであろうが、灯台守という社会的責務の大きさを受け止めることによって私情をのり超えた様子が彷彿とする内容である。

(愛燦燦) 小椋佳・詩・曲, 美空ひばり・唄, 昭和61年

- 1, 雨 さんさんと この身に落ちて わずかばかりの運の悪さを 恨んだりして
人は哀しい 哀しいものですね それでも過去達は 優しく睫毛に憩う
人生って 不思議なものですね
- 2, 風 散々と この身に荒れて 思いどおりにならない夢を 失くしたりして
人はかよわい かよわいものですね それでも未来達は 人待ち顔してほほえむ
人生って 嬉しいものですね
- 3, 愛 燦々と この身に降って 心秘かな嬉し涙を 流したりして
人はかわいい かわいいものですね ああ 過去達は優しく睫毛に憩う
人生って 不思議なものですね ああ 未来達は 人待ち顔してほほえむ
人生って 嬉しいものですね

特に「神」の語は使用されないが、ここでは、人智を超えた何かに支えられている自己に気づき、少々の不運や私情を「取るに足りないもの」として再解釈し、人間一般に愛を見いだした喜びが唄われる。神のようなものの存在に気づいている内容である。

おわりに～「情念」から「信念」への転換～

先に記した歌は、そのまま私情が持ち続けられれば情念としてこころの底に累積するところを、人・社会・神などと関係づけることによって、「情念」から「信念」のニュアンスへとこころを発達させた場合を示すと言えよう。情念は、時には人の「生」を動かす契機である。「今に見ている!」、「こん畜生!」などの情念が、ライフコースにがむしゃらな努力を生起させることがある。したがって、情念を持つこと自体がライフコースにおいてすべてマイナスというわけではない。問題は、それを洗練し、訓練し、磨き上げた「信念」に昇華出来るかどうかである。昇華過程の乏しい、ただ熱く燃え上がるだけの情念は、ともすれば公正・公平性を欠いた「独りよがり」の、時には反・非社会的で「はた迷惑な」行動である事に気づかず、横車を押す場合がある。昇華するには、他者や社会、神などの視点が必要なことについてはすでに述べた。同時に、そうした視点を柔軟に使いこなす能力もまた必要であることを書き添えて、ひとまず、論を閉じたいと思う。

註

- 1) 見田宗介『近代日本の心情の歴史～流行歌の社会心理史～』、講談社、1978、参照。見田氏は、歌詞に心情を読みとり、それを歴史的背景の推移において分析している。この手法に学びながら、筆者の場合は、個人の心理的・社会的・精神的発達の過程を分析出来るのではないかと考えた点で、見田氏の場合と異なる。
- 2) 大分大学公開講座における講義内容による。なお、講義者は小川正文氏(音楽科教育)。講座の年月については記録がない。

- 3) 以下、歌詞は、エディト 90、『昭和の歌 5 1 1』小学館、1991、及び、椎葉京一『日本のうた』第1集～第7集、野ばら社、2000、による。
- 4) 松永伍一「演歌・耽美の形式」、『太陽 No245』平凡社 1982、56 頁。松永は、「演歌を艶歌と書くのもよし、怨歌とするのもよし、どういう字を当てても、所詮は情念を浄化させる歌であればいいのだから。……表皮は新しく核は古い、という世相と情念との関係が演歌を確立したとみれば、希望のもてぬ時代がつづくかぎり演歌の命脈は保たれるという結論になる」と記す。
- 5) 例えば、ドイツのポーランド侵攻、日本による中国侵略などである。
- 6) ジェンダーは、一般に、社会的・文化的な性役割を指す語である。

On Control of Sentiments in the Course of Human Life

—The lyric lines of popular songs as the clue —

YAMAGISHI Haruo

Abstract

Usually, how one's life course turns out is unexpected. Once in a while, we feel an absurdity about the consequence of our course of life. If we cannot control these absurdities, the growth of our mind is to be arrested. So, it is important to control sentiment, such as regret, jealousy, despair and so on. The aim of this paper is to make clear the way of control over sentiments with the lyric lines of popular songs as the clue.

【Key words】 life course, sentiments, others, public, sociality, intention